

一 徒然草 第三十四段

兼好法師

二 空華集

義堂

甲香かいかうは、ほら貝のやうなるが、ちひさくて、口のほどほそながの、細長にして出でたる貝のふたなり。武蔵国金沢といふ浦にありしを、所の者は「へなたりと申し侍る」とぞ言ひし。
(日本古典文学大系三〇)

〔解説〕 香の道具の「甲香」というのはほら貝のようであるが、それより小さくて、口のへんが細長く突き出ている貝の蓋ふたである。

〔作者〕 吉田兼好(一一二八—一三五二?)

室町時代の歌人、随筆家。もと武士であったが僧となり、そのころの京都附近の戦争をさけて方々にかくれ住んだ。儒教や仏教の書も読み日本の古い文学にも親しみ、広い知識とするどい観察眼によつて書いた随筆「徒然草」は、平安時代の「枕草子」とともに日本の二大随筆として有名であり、文学史の上にな大切な作品である。歌人としてもそのころの代表的な人であり「兼好法師自撰家集」がある。

一 観ミ金澤藏書ニ而作

玉帳修シ文講フ武餘ル

牙籤映シテ日窺ニ蝸斗ニ

圯上一編看不足

照ス心古教君家有ガニ

遣ム人來覓ニ舊藏書ヲ

縹帙乘ジテ晴走ラシム蝨魚ヲ

鄴候三萬欲スル如何ニ

収メ在胸中ニ五車ヲ

(東京大学史料編纂所本)

〔参考〕 北条氏滅亡後、文庫は称名寺の僧侶によつて保管された。応安六年禅僧、観中中諦が將軍足利義満の命で古書蒐集で金沢に下つた時、義堂とともに金沢文庫の蔵書を閲覧した。その時の詩であつて当時の金沢文庫の状況を知ることができる。

〔書き下し文〕

金沢の蔵書を観て作る

玉帳文を修し武を講ずるの余り

人をして来りて旧蔵書を覓めしむ

牙籤ガゼン日に映じて蝸蚪カトを窺ミひ

註3 縹帙ひょうちつ晴に乘じて蠹魚とぎよを走らしむ

註5 圯上ひょうじやうの一編看んとして足らず

註6 鄴候ぎやうこう三万何如せんとか欲する

心を照らす古教、君が家に有り

胸中に収在して五車を圧す

註1 牙籤ぎやくし（書名を書いた象牙製の札）

註2 蛭蚪むしづ（おたまじやくし）

註3 縹帙ひょうちつ（はなだ色（そらいろ）の書冊包み）

註4 蠹魚とぎよ（しみ。書を読んで活用の才のない事をいう）

註5 圯上ひょうじやう（土橋の上）

註6 鄴候ぎやうこう（鄴は地名、候は人名）

二 癸丑冬同みづのふゆ詠観中ていかんちゆう宿しゆく六浦楞伽山ろくぽうりやうがさん有あ懷わい方外はうがい法兄はうがい

次つぎ韻いん

方外はうがい乾坤けんけん足あし勝遊しやうゆう人間にんかん無な處ところ不な通とほ幽ゆう

鐘鳴かねなる水寺みづでら黄昏たふし月つき 覺おぼ劍けん重來じゆうらい又また刻き舟ふね

（東京大学史料編纂所本）

〔書き下し文〕

註1

癸丑みづのふゆの冬、詠観中ていかんちゆうと同じく六浦楞伽山ろくぽうりやうがさんに宿して、方外

法兄はうがいを懐なつう有り、韻いんを次ぐ。

方外はうがいの乾坤勝遊けんけんしやうゆうするに足れり

人間にんかん処ところとして幽ゆうに通とほぜざる無し

鐘かねは鳴る水寺みづでら黄昏たふしの月つき

劍けんを覺おぼめて重じゆうね来たりて又また舟ふねを刻きむ

註1 詠観中ていかんちゆう（人名）

註2 方外はうがい（人名、方外宏遠、夢想国師の古い弟子）

三 次つぎ韻遊いんゆう泊船はくせん歸かへり答こたへ同游どうゆう無外むがい林翁りんおう諸友しよゆう

曉呼あけよび六浦渡頭舟ろくぽうりやうがせんぶね同訪どうぼう蓬萊海上洲ほうらいかうじゆう

自笑みづかひ生來なまうま無な道骨だうこつ神山しんがみ空作くうさく等閑遊とうかんゆう

平生へいぜい蹤跡しゆうせき遍あま江湖かうこ獨有ひとり此遊こゝのゆう應おほ世無よのな

無外むがい林翁りんおう諸伯仲しよはくちゆう有あ詩如しにが玉洞ぎよく氷壺ひやう

兩日りやうじつ同遊どうゆう海上山かうじやうざん仙洲せんしゆう鬼濟きしゆ許もと追攀しゆはん

歸來きらい獨臥どくふ筠窓しんそう雨あめ 夢ゆめ遶丹崖りやうたんが翠壁すいへき問と

（東京大学史料編纂所本）

〔書き下し文〕

韻を泊船に遊び帰るに次いで同遊註1無外林翁諸友に答う

曉に六浦渡頭の舟を呼び

同じく蓬萊海上の洲を訪ふ。

自ら笑ふ生来道骨註2無きことを

神山空しく等閑の遊びを作す

平生の蹤跡江湖註3に遍く

独り此の遊びありて応まさに世に無かるべし

無外林翁諸れ伯仲す

詩有りて、玉の如くにして氷壺に洞たり

両日同遊海上の山

仙洲鬼渚、追攀ついはんを許す

帰り来たりて独り臥す筠窓の雨

夢は遶めぐる丹崖翠壁の間

註1 無外林翁（人名、無外円方、少林如春（林翁）の二人

をあわせた呼び名）

註2 道骨（道徳的な心構え、道義心）

註3 蹤跡しやうせき（足あと、ゆくえ、行き先）

〔作者〕 義堂周信（一三二五—一三八八）

南北朝時代の臨濟宗の学僧。別号は空華道人。土佐の人。建仁寺南禅寺に住む。梵、漢の学に通じ、また、詩文をよくした。

著「空華集」「空華日用工夫略集」など。空華集は詩文集。二十卷。五山詩文集中最も整つているといわれている。

「空華」は仏語で、病みかすんだ眼で虚空を望めば、花があるように見える意。煩惱のみちた心にあらわれる妄想が、真実にはないものであるということ。

三 梅花無盡藏

萬里集九

之梅一栽。
故名之。

文明竜集丙午十有八年小春（中略）二十有七己亥。槃桓瀨戸六浦之濱。遺廟之前掛昔時諸老所作之詩板。

邊傍点劃不泯。如新鐫之也。漸進入金澤稱名律寺間。西湖梅以未開爲遺恨矣。珠簾猫兒與竺群書之目錄。稱名寺水晶簾。唐猫兒之孫。一大時教及群書。蓋先代貯焉。無介者而不能觸目。寺秘件件之物。容易無使人看之也。東室有律漢對案寫卷。遂不揚面。吁律縛之傳。但守法而已。出金澤七八里許。攀最高頂。則山々水々。面々之佳致。昔畫師金岡絶倒擲筆之處。有名無基。但其名不甚佳。相傳曰濃見堂也（中略）作六浦。西湖梅。畫師擲筆峯三首。

遺廟松圍六浦橋。朗吟繫馬石支腰。飯鴉飛破翠屏面。剩被風聲添晚潮。金澤修理大夫□□□□六浦廟前有古栢屈槃。

前朝金澤古招提。遊十年遲雖噬臍。梅有西湖一指枝。未開遺恨翠禽啼。金澤西湖梅先代之主属南船。移杭州西湖

登々匍匐路攀高。景集大成忘却勞。秀水奇山雲不裏。畫師絶倒擲秋毫。畫師擲筆之峰。

（統群書類從）

〔書き下し文〕

文明竜集丙午十有八年の小春、二十有七己亥。槃桓瀨戸六浦の浜に之く。遺廟の前、昔時諸老の作りし所の詩板を掛く。辺傍の点画泯びずして新たに之を鐫るが如し。漸く進みて金沢稱名律寺に入るの間、西湖梅以って未だ開かずして遺恨と為す。珠簾、猫兒、竺群書之目錄とあり。（稱名寺水晶簾、唐猫兒の孫、一大時教及び群書は蓋し先代焉を貯う。）介する者無ければ目に触るる能わず。（寺秘件々の物は容易に人をして之を看せ使むる無し）東室に律漢あれば案に対え卷を写す。遂に面を揚げず。吁律縛の伝なり。但し守法なれば己む。金沢を出でて七八里許。最高頂に攀ずれば則ち山々、水々、面々、之佳致なり。昔画師金岡絶倒して筆を擲つ

の処、名有りて基無し、但し其の名甚だしくは佳ならず。
相伝えて濃見堂と曰う。(中略)

六浦、西湖梅、画師擲筆峯三首を作る。

遺廟の松は六浦の橋を囲み、朗吟して繫馬石に腰を支
う。飯鴉は飛破す翠屏の面、剩へ風声を破りて晩潮に
添う。

(金沢修理大夫□□□、六浦廟前に占柏の屈繫せる有
り。)

前朝の金沢古し招提。遊ぶこと十年遅く臍を噬むと雖
も梅西湖に有りて枝を指して拝す。未だ開かずして恨
を遺し翠禽の啼く。

(西湖の梅は先代の主、南船に属し、杭州西湖之梅を
移して栽う。故に之を名づく。)

登々匍匐して路高を攀ず。景集まりて大成し勞を忘却
す。秀水奇山雲の裏まず。画師絶倒して秋毫を擲つ。

(画師擲筆之峰なり)

註1 裏(つゝむ)

註2 秋毫(秋になつて抜け変わった獣の細い毛)

〔作者〕 万里集九(一四二八―不明)

室町末期の学僧、梅花道人と号す。幼にして京都、相國寺に
て出家、業を大圭和尚に受ける。応仁の乱を避けて、近江美濃
尾張の国を経て、放浪す。遂には法衣を脱いで居士と称し、梅
花無尽蔵漆桶不会と号した。

文明十八年(一四八六)武州に遊び、太田道灌に厚遇され、
上杉定正にも招かれて鎌倉に入る。その後上野、越後、美濃に
入り、長良川辺に住み詩文の筆をとつた。梅花無尽蔵はその漢
詩文集。

四 廻國雜記

道 興

このついでに建長円覚以下の五山を順見し侍りて。是
より瀬戸金沢といへる勝地の侍るを尋ゆくに。瀬戸の沖
に漁舟あまた見えけるを。

よるへなき身のたくひ哉波あらき瀬戸の汐あひ渡る舟人
磯山づたひ。残のもみぢ。見所多かりければ。

冬されはせとの浦はのみなと山幾しほみちて残るもみちそ
金沢にて時宗の庵の侍りけるに立よりて茶を所望しける
に。庭に残菊の黄なるを見てよめる。

誰爰にほりうつしけん金沢や黄なる花さく菊の一本

この在所に称名寺といへる律院侍り。ことのほかなる古所にて。伽藍などもさりぬべきさまなる所々順礼し侍けり。三重の塔婆にまうでけるに老僧に行あひぬ。この塔の由来などたづねければ。これにこそ楊貴妃の玉のすだれ二かけ安置し侍れ。我はからひにて侍ましかば。一見させ侍るべき物をとて。懇切なる芳志ぞ見え侍りき。既に下向せんとしけるに。この僧いろくくに思案して申やう。しばらくあひまち侍れ。住寺に申こゝろみんとて僧立入ぬ。やゝありて立帰りていふ様。此玉すだれ当寺の靈宝として毎年三月十五日に取出すよりほかにはかたく禁制し侍ども。拙老経廻の義。前後其例有がたく侍れば。衆僧談合し侍りて。一見をゆるし侍るべきよし申す。まことにふしぎなる機縁なり。簾の長さ三尺四寸ひろさは四尺ばかりにて。水精のほそさ世のつねの簾よりも猶ほそく。かたちは見え侍らず。玉妃のそのいにしへに九花帳に掛侍りけんことなど思ひやり侍れば。千古の感緒今更肝に銘じて。皆人袖を濡し侍き。

遠き世のかたみを残す玉簾思ひもかけぬ袖の露哉

(群書類従本)

〔作者〕 准后道興、左大臣従一位関白藤原房嗣の三男、聖護院門主大僧正、准三后となる。廻国雜記は文明十八年(一四八六)六月十六日に柴庵を出で、近江―若狭―越前―加賀―能登―越中―越後―上野―武藏―鎌倉から金沢に廻遊、その後、十九年三月に陸奥松島・塩釜に遊んだ時の紀行文である。応仁二年(一四六八)の乱がおさまらず約十八年後に当たつている。

五 北國紀行

堯 惠

同じ比六浦金沢をみるに。乱山かさなりて嶋となり。青嶂そぼだちて海をかくす。神靈絶妙の勝地なり。金沢にいたりて称名寺といへる律の寺あり。むかし為相卿。いかにして此一もとに時雨けむ山に先たつ庭の紅葉葉と侍りしより後は。此木青はかは玄冬まで侍るよし聞ゆる楓樹くち残て仏殿の軒に侍り。

さきたゝは此一もとも残らしとかたみの時雨青葉にそふる

(群書類従本)

〔作者〕法師堯恵（一四三〇—一四九八以後）

室町中期の人。藤の坊と号した。堯考法師の門下、和歌の道に通じ、古今伝受の役割をはたす。文明十七年（一四八五）の秋、京都を出立後美濃に滞在。翌十八年五月、飛弾―越中―越後―信濃善光寺―越後柏崎―上野の臼井（碓氷）・草津・伊香保―下野の佐野―武蔵の狭山・鳥越―相模の鎌倉―武蔵の金沢・中野等の各地を歴訪した時の紀行である。

※参考、金沢には文明十九年五月頃と推定される。

六 東國紀行

谷 宗牧

まづ金沢一見すべしとていそぎ侍れば。後藤案内いたしてうちいづるほど。めにちかき谷々、右大将家の御跡。山がつもこゝろあるにや。はたにもなさず芝しげらせ。はなち飼駒所えがほなり。するすみいけずきひやされしながれ水。さびいてかけもみえず。こゝかしこ過がてにするほど。暮ぬべしといへばいそぎつきたり。はるかなるひがた。山ふかくいりぬる磯みるめもをよばず。金岡筆なげすてたるとぞ。うへなる山にあり。称名寺にいたりてみれば。青葉の紅葉事問べき人だになし。しばらく有て。一室とやらんいふ老僧出で。為相卿詠歌物がた

りして。紅葉も老木に成てうへかへられし庭の跡などをしへられ。我坊のはなけふをまちいでたるやうなればとて。こゝろ有げにさかづき出されて。このはなをばいかどなどあれば。

けふそ思ふみぬ世の秋の色までもこの一本の花の匂ひになど申たれば。又かたはらより発句ひとつせよかし。この老僧興行の心ざしあるべけれどこゝほどの見苦しき。はどかりなきにしもあらねばなど。わりなきやうにて。

秋もいさ青葉に匂ふ花の露

（群書類従本）

〔作者〕谷宗牧、連歌師、京都の宮方、門跡・公郷等や近畿の三好長慶、関東の北条氏康、中国の尼子晴久等の武将の連歌師として厚遇をうけ、詩僧文人が戦乱の世にはたした政治的文化的役割は大きかった。天文一三年（一五四四）九月から翌年の二月にわたり、東海道諸国を遊歴した時の紀行で多くの俳句を載せている。

七 名所和歌物語

三浦浄心

金沢の地景の事

見しは。今恩老武州、久良岐の郡を。じゆんれいせしに。金沢のみなど。海辺のてうぼう。世に比類なき境地。四

海五湖の風景立所にあらはれたり。此溪を見渡ば。海中へ。東より。すぎきが崎出。西のかたよりは。弁才天嶋出たり。此両嶋崎。海中にて出合。其あはひ。十間程の瀬戸有て。橋かゝりたり。内海はまんくたる大海。平地にはらんをたて。しほの満干はやき事。さらにたどるに物なし橋のほとりに有て。目をおどろかすばかり也。しばらく見るが内に。大流は干瀉と成て。真砂平々として。見し面がけさらになし。是たゞ。かんたんのかり枕。夢のさめたる心地す。何物有て。山沓さうげん。干珠満珠を。今こゝにしづめけるかと。不思議のあまりに。これをかたらん。友もなければ。口号侍る○此浦に。龍の宮古や。うつすらん。満干の玉の。きどくあらはすとぞよみたる。扱又此前の海へ又。東より野嶋が崎出。西よりむろの木が崎。出向ひ。其間に一町程の大瀬戸有て。塩の満干はやし。内は広き大海にて。底ふかし。汀のめぐりは。三里其うちの入江小嶋。あげてかぞふべからず。そとの海おもてには。陸地をはなれて。猿嶋。夏嵐。え

ぼし嶋。うかび。うしろには知足山。きんたくさん。そびえ。れいげんの。山嶺つづきたるは。近江の水海にとならず津々浦々にて。綱引をなせば。沖にはうかへる海士の小舟数々に。立さはぎたる村のもめ。渚にあさる友千鳥の。鳴かはしつゝ声々に。しやけ。町や。かまりや。六浦の。塩やく煙は山にたなびき。嶋々。入江くに。塩たうくとみち。波。ゆうくたる。磯辺の松風は琴の音をしらぶるよそほひ。南は海。北は嶺つゞき。称名寺。龍花寺は。他にことなる境地。時えがほなる。山くのもみぢは。たゞ錦をさらすがごとし。拾遺に○水海に。秋の山辺を移しては。はたばり広。錦とぞ見ると。観教が詠ぜしに。ことならず。われ聞及しは。当地には。名所旧跡。其外色々様々の。名物有とかや。是を里人に尋ばやとおもふ処に。是に翁あり。われ問ていはく。当所はじめて一見の者也。されば。金沢。八景の詩歌と号し。皆人賞び給へり。扱八景は。いづくをさして。名付やらん。委をしへ給へ。翁答て。金沢八景の詩

哥。世にかくれなし○瀟湘夜雨とは。あれに見えたる一
村の。こずみといふ在所也。晴天の夜も。かならず雨そ
くく○洞庭秋月は向ひの原○漁村夕照は瀬戸○江天暮
雪は。野嶋○遠浦帆帆は。むろの木○山市晴嵐は。
たうげ○平洲落鷹は。ひらかた○遠寺晚鐘は。称名
寺。是を八景と号す。又問ていはく。四石八木とて。
由来ある木石有とかや。是はいづくに候ぞ。其名をを
しへ給へ。翁答て。四石八木当所の名物也○美女せ
き○うばせき両石は称名寺の寺中にある○ふくせき
は。瀬戸にあり○とびいしは。金龍寺の上にある。是
四石也八木と名付は○すゞめが浦の松は野嶋にあり○び
やくしんは瀬戸にあり○黒梅○桜梅此両木は。称名寺に
あり但。今は絶てなし○文珠堂桜○普賢堂桜○西湖梅○
青葉楓。此四木は。称名寺にあり。宗祇の哥に○ことの
葉に。心そめてや。時雨木も。此一もとは。みどりなる
らん。宗牧の発句に○秋もいさ。青葉に匂ふ。花の露。
近衛殿の御哥に○けふぞ見る。この一もとの。若楓。時

雨になる。秋はありともと詠し給ふ。いにしへより今
に至まで。詩人哥人。当地へ尋来り。詩をうそぶき。哥
をすじ給ふ事。あげてかぞふべからずといふ。われ聞て
此浦の景風。聞しより。見て目をおどるかす。かるがゆ
へに。当代の名画。狩野右京。江戸の御殿に是をうつさ
れたり。其おましを。金沢のまと申とかや。誠に当地の
景。見所おほかりけりといへば。翁聞て。当浦の景。天
下無双によつて。うつされたるも断也。然といへ共。い
にしへをつたへ聞しに。金岡といへる絵師。此金沢山に
あがり。湊の有様を。心を尽し写しける処に。時もいつ
しか。引塩に。跡は干潟となり。平地と成て。見し面影
さらに一つもなし。其時金岡。筆を捨て。のけにかへる。
此いはれ候ひしにより。此山に堂を立をき。是をのけだ
うと名付。又一説に。此堂にてよく見て。写しける故。
能見堂と書ともいふ。今にたゞせず。此堂あり。

(以下略)

(内閣文庫本)

〔作者〕三浦浄心(一五六五—一六四四)

雅号を三五庵木算といい、もと北条氏政の家臣。「そぶる物

語」「北条五代記」「慶長見聞集」も著している。

「名所和歌物語」は、別名を「順礼物語」「三浦浄心諸国行脚物語」ともいい、本文の内容から慶長十九年（一六一四）ごろ刊行と思われる。

八 丙辰紀行

林 道春

金 沢

金沢の絶景は東州の佳境にて。事好むもの丹青の手をかりて屏風にうつし。市杵島天橋立にも。いかでかおとるべきなどもてなしあへり。北条氏天下の権をとる時に文庫を建て。金沢文庫といへる四字を。儒書には黒印をおし。仏経には朱印をつきておさめ置ける。越後守平貞顕この所にて。清原教隆に群書治要を読せける。余が見侍りしも。文選。清原師光が左伝。教隆が群書治要、齋民要術。律令義解。本朝文粹。続本朝文粹。続日本紀などのたぐひ。其外人家に所々ありけるも。一部と調たるはまれなり。一切経も取ほごして。纒残りて今に金沢にあり。古記典籍の厄に逢る事。いにしへより今にいたるまで。いくたびといふ事をしらず。蘇我氏が乱は我朝の一秦とも申べき。宅嗣が芸亭は名をだにもきかず。宇治の宝蔵蓮華王院の宝蔵なども跡さへぞなき。誠に祝融に

うばはれ。陽侯におぼるゝのみならず。兵燹にほろび馬蹄にふみ散さる。心あらん人むかしをおもひ出ざらんや。されば人のかたりしは。先聖先師九哲 影。六経の注疏。いまに足利にあり。小野篁が東国へまかりける時に。足利に読書の堂を作りしが。今に残りてあるぞ是なるとなん。余もまかりて見むとのみあらましにて年月をすぐしぬ。

懐古涙痕羈旅情。腐儒早晩起蒼生。人亡書泯幾回、
歳。境致空留金沢名。

（続群書類従）

〔作者〕 林道春（一五八三—一六五七）

号は羅山、江戸初期の幕府の儒官。剃髪して道春と号す。京都の人。藤原惺窩に朱子学を学び、家康以後四代の侍講として文書応接・律令制定などに与り、また忍岡に学問所及び聖堂を建て、昌平学の起源をなした。著「大学抄」「大学解」「論語解」以下多数。

丙辰紀行は元和二年（一六一六）丙辰江戸を出発、東海道より関西地方を経て、比叡、大津に至つた紀行文。その間名所五十二ヶ所をあげ、その地の史実典故を録し、詩歌の述作を添えている。